

## 【資料紹介】

### 梨本宮伊都子日記に見る大磯関係記事 (1913年)

小田部 雄次  
(静岡福祉大学名誉教授)

1913年(大正2)、梨本宮家は神奈川県大磯町に別荘を持った。西小磯西柳原の畑・山林・住地など2,393坪あったという。梨本宮妃の伊都子の実家の鍋島家が、すでに1896年(明治29)に西小磯稲荷松に別荘を持っており、伊都子は子供のころから大磯になじんでいた。伊都子が15歳であった1897年2月14日から3月28日まで、大磯の鍋島別荘に滞在しており、そのときの日記『大磯日記』も残されている。そうした縁もあり、結婚後、梨本宮妃となった伊都子は、大磯に宮家の別荘を建てたのであった。以後、毎年のように大磯を訪れた。ある年は冬であり、ある年は夏であり、スペイン風邪が流行した1918年前後の時期も一家で風邪の療養などで何度も滞在している(拙著『百年前のパンデミックと皇室 梨本宮伊都子妃の見たスペイン風邪』敬文舎 2020年)。

宮家の別荘が出来た1913年の伊都子の日記には、別荘所有にあたり鍋島家や地元の人々の協力があったことが記されている。また、水難事故救済に協力したり、地曳網を見たり、海岸で月をみたり、千畳敷を登山したり、地元にとけこんだ生活をしてきたこともわかる。隣家が建築家のジョサイア・コンドルの別荘であり、コンドル夫人や孫たちが遊びに来たことや、伊藤博文の未亡人である梅子もしばしば訪ねてきたことが書き残されていた。東京へ帰るときなどのお土産に、名物の虎子まんじゅうなどを買っていったことなど、大磯らしさが伝わる記事も多い。長い滞在の時もあれば、日帰りの時もあった。以下、1913年の大磯にかかわる記事を紹介する。なお、\*や【 】の注記や濁点などは小田部が付した。

一九一三年(大正二)

一月六日 月 晴 午前八時三十七分新橋発にて兩人(マス、飛田御供)にて大磯へ行。鍋島家訪問、ゆるりと昼餐をともし、午後海岸に出、今朝の寒さはどこへかと思はるるほどあたたかく長閑なり。よきよき保養をなし、午後四時一分大磯発にて帰京す。午後六時十分、新橋に着す。

二十九日 水 晴 中々寒し。大磯にて地所買入の事に付、折合其他にて白井【兵作】家従大磯へ行、それより名古屋\*へ伺ひのため出張す。

名古屋\*

当時、梨本宮守正は第六連隊長で名古屋に滞在。

二月一日 土 晴風 白井家従、大磯及名古屋より帰京す。

二日 日 伊都子第三十二回誕生日なれども大喪中\*に付、御遠慮申上、何事も祝事なし。午前八時三十八分新橋発にて、伊都子大磯へ行。同十時四十七分、大磯に着。鍋島家に至りゆるりと昼餐をなし、午後より皆々にて例の地面を見に行。中々よき所にて気に入たり。かへれば御茶にてもはや三時半故、支度もそこそこにて四時一分、大磯発にて帰京す。

一 やき海苔 十罐 鍋島家へ。一 同五 慈貞院\*様へ。一金 三千疋\* 御次\*一同へ。かへる時御みやに、虎子まんぢう\*一箱、はんぺん一籠、子供らへ小タンス及筆入一箇づつ、虎子まんぢう一、小箱一づつ。慈貞院様より、せんべい二かん。

大喪中\*

明治天皇の崩御にともなう喪中。

慈貞院\*

第十代鍋島直正の長女、<sup>たけこ みつひめ</sup>健子。貢姫。第十一代鍋島直大の姉、伊都子の伯母。上野前橋の松平直侯<sup>なおよし</sup>に嫁ぐも、直侯の早世により佐賀の武雄で転地療養し、佐賀城で直正の継室筆姫らと過して後、上京して鍋島家で暮らした。1918年5月に亡くなった。

疋\*

匹とも。織物の長さの単位で、反物二反分。一疋で大人用の着物と羽織を対にして仕立てられる。また、銭の単位でもあり、一疋は25文で、千文を1円と換算すると三千疋は750円。

次\*

宮家の職員のこと。

虎子まんぢう\*

大磯町の新杵などが製造販売する銘菓。現在、新杵が販売している菓子は、こしあん入りの饅頭で、虎の焼き印がある。

三日 月 晴 けふは白井、坪井【祥】も大磯へ行、色々約束すまし、大方のところ取きめ、夜かへる。

二十日 木 風晴 午前八時三十分新橋発にて、いつ子は桜井【鋤子・御用取扱】をつれ沼津に赴く。宮様は午前七時半、名古屋発にて沼津へならせられ、ここにて御一所になり、二時過、皇太后陛下【昭憲皇太后】の御機嫌を伺ひ、御対面遊ばしいいただき、様々の御話あり。【中略】三時ごろ一寸宮様のみお隣の皇太子殿下【のちの昭和天皇】の所へならせられ御機嫌御伺遊ばし、御前お庭其他拝見し、ゆるりとして三時三十分沼津発にて帰途につく。同六時二十分、大磯へ着、ここにて桜井及家従は東京へかへり、午前中よりさきに着したる白井家従の御供にてここにて下車し、鍋島家別邸へ入る。夕食、入浴等してゆるりとし、二階にて一泊す。

一 白縮緬、一匹。一 松魚、一折。

右は此度の大磯に買入たる別邸の色々御世話になりたる当【答】礼として、御両親様へ。

一 百円づつ 高木家従及はつたけ屋\*主人へ。

右は別邸買入に付、色々ほんそうしたるに付、挨拶として。

一 玩具 三品。一 おさつあげ、お菓子三罐。一次一同へ金十五円。一金五円、料理人其他へ。

右、鍋島家へ此度一泊に付。

はつたけ屋\*

初竹屋。大磯駅の北側に招仙閣という伊藤博文がひいきにしていた旅館があり、大正時代にその旅館をたたんだ主人がはじめた店。のちに梨本宮別邸に食料品などを届けていた記事が残る。昭和に呉服店、戦後は文具店を営んだ。

二十一日 金 曇 午前七時二十分起床、同九時より兩人一ト足先に出かけ、此度買入たる別邸へ行。中々よきところなり。家の内、其他見まはりゐたるに、御両親様も御車にて御出に相成、御一所に庭を見てゐたるに、松露出たるなどおもしろし。それよりともども海岸に出、そろそろ散歩して御別邸へかへる。御昼を食し、御母様は十二時十六分の汽車にて御上京、われわれはゆるりと支度して、三時十六分大磯発にて帰京す。午後五時五分、無事新橋へ着、其後事なし。

大磯にてかまぼこ一籠、とらまんぢう一、いただく。とらせんべい二、ほうほけきやう\*三、慈貞院様より。

ほうほけきやう\*

当時、新杵で売られていた大磯名物の菓子「ホウホケキョー」。

四月五日 土 晴 <上欄>今日は吉日とて大磯の地ならしをはじむ。

七月十三日 日 晴 午前中、蔵より色々出し、大磯へさき廻しに出す。

十九日 金【土\*】 晴 午前八時十一分渋谷駅発にて、いつ子大磯へ行。品川にてのりかへ、十時四十五分大磯着。人力車にて十六分にて別邸に着。新築も出来上り、大によくなる。それぞれ棚、ながしなど申付、ゆるりと海岸にも出、午後四時一分大磯発にて帰京。六時四十一分、渋谷に着せり。

\*七月十八日に日記を書かなかつたため、七月十九日から八月二日まで曜日が一つずれた。

八月二日 金【土】 雨後晴 午後一時二十五分新橋発にて、一同大磯別邸へ出発し、同三時五十分大磯着。無事入家、万事ととのはず。夜に入、夕食後、散歩に海岸に出たり。

三日 日 晴 少しく涼し、いろいろするのに都合よし。宮様は陛下【大正天皇】より十時半御召につき、午前六時五十八分大磯発にて御帰京、直に参内のはづ。午前中それぞれ備付も出来、十一時ごろより一寸海岸にいで、川をわたり、おもしろく、十一時四十分ごろかへる。中々あつし。午後二時四十分頃、宮様還御遊ばさる（東京を十二時十分発、同二時二十四分大磯着）。入浴後、夕食もすまし、皆々にて海岸散歩し、くらくなりてかへる。

四日 月 晴 午前五時三十五分起床。千代浦\*とタマとは日の出を見に行、おらず。ややありてかへり来る。食事前、海岸散歩し、七時食事終り後又地引網をみると皆々出たれども、近ごろはここにてあみをひろげず、取れたる分を直に舟にのせ、市場へ持ち行故、ここあたりにては引だけにてつまらぬ事なり。それより川のほとり迄あるき、十時過かへる。午後は家にてくらす。昼ごろ、伊藤公爵後室梅子殿より使にて、御機嫌伺として鮎六十尾、御菓一折献上す。夕食後は海岸散歩。

千代浦\*

梨本宮家の老女（侍女頭）。本名ではなく代々、老女が名のつた。

五日 火 晴 午前五時四十分起床、一寸砂山迄行。朝食の後、一寸新聞などみて、八時四十分ごろより皆々にて散歩に出、表通りより身代り地蔵様の前より畑をぬけ、松林より川のほとりに出、海岸へ出んとせしに、この川にて先のころより四人の子供泳ぎゐたるが見るまに一人もぐりたるまま浮ばぬ故、いかにしたるならんと思ひゐたるに、幸にも後の方より百姓二人くわをかたげて来りたる故、其百姓に早くあの水中に子供が入つたなり出てこぬ故、たすけてと云ひたる故、百姓は大いそぎにて水中に入りさがしたれば、幸に手にさはり、肩にかけて出て来たる。子供はぐたぐたになりゐたり。早々さかかにし、水をはかせ、本田も手つだひてせななどさすりゐたれば、呼吸出、目を開きたり。其間に一方一所に入つて泳ぎゐたる子供らは、そこらに人を呼びに行たる故、獵師や家の人など出で来り。いろいろ手あてしたれば、幸にたすかり、大丈夫ならんと思ひ見し故、吾等は家路の方へそろそろとあるきかへりたり。実にきわわき事なり。午後てりはつよけれども風あり、涼しくくらす。温度は八十六度はあるらし。夕食後、海岸散歩。

六日 水 晴 午前六時過より海岸散歩。七時朝餐、又八時過より海岸に出かけたれどもあつく、九時過かへる。けふはめづらしくあつし。午後出ず。

三時過、一寸湯をかかり、四時半出門、兩人、マス御供。帰京の途につく。五時七分大磯発、七時七分新橋着。明日のしたくして十時過いねる。東京は中々むしあつし。

七日 木 晴 十二時十分新宿発にて大磯にむけ出発す（スマ御供）、午後二時二十四分大磯に着。夕食後、海岸散歩。

八日 金 晴 朝六時より海岸散歩、すずし。別にことなく日中は家にてくらしたり。午後夕食後、海岸散歩に出る。月そろそろ出（五日位）、中々よろし。漁火も遠くちかく見え、得もいわれぬけしきなり。午前九時過、村地長孝\*御機嫌伺に来る。直にかへる。

村地長孝\*

梨本宮家の主治医。

九日 土 晴 午前六時ごろより海岸に散歩に出、七時かへる。けふは少しくむしあつし。同じく日中は家にてくらす。夕食後は海岸に出、くらくなる迄涼む。

十日 日 晴 午前、同じく海岸散歩。同十時ごろ小林タメ（方子の乳母）久々にて来る。御上に平塚桃三箱、ほほづき、次においも沢山持ち来る。ゆるりと遊び、夕方五時過、食事も終りてかへる。一、二千疋献上ものの御かへし。外に一、ゆかた地一反、糸り、小袋にリボン入れて、をやる。又、方子より何か小供によき品五品ほどと絵をかいてやる。午後、夕食後もいつもの如く散歩し、後、九時御出門、宮様は名古屋へ向け御立遊ばさる。同九時三十分、大磯発にて国府津にて急行に御乗かへ遊ばすはづ。二階より汽車の御通過を見あげ後、寝る。午後、白井来り。本田は一時過帰京す。名古屋へは香田御供す。

十一日 月 晴 朝六時過より海岸散歩、綱引を見て、七時二十分かへる。午前中しごとなどしてくらし、わりにあつくくらす。夕食後、又々海岸散歩し、月も出、漁火も見え、中々よし。

十二日 火 晴 けふは朝くもりたれども、又々てり出したり。朝六時より海岸散歩、又々あみ引を見てかへる。午前十時過、隣のコンデル氏\*方より使にて、東京より参りし故とて野菜もの献上す。まもなく夫人\*、孫のウラ\*さん及ジョードンあやめ\*同道にて来る。色々話をなし、ウラさん中々の大よろこびにて、家中かけづりあるき、にぎやかなり。十一時五十分ごろやうやうかへる。午後、中々あつ

し、夕食後、又々海岸に出たれども、少しも風なくむしむしす。あやめさんも出かけ、ともにあるきながら話。月きえたるころ家に入る。

コンデル氏\*

ジョサイア・コンデル。ジョサイア・コンドル。イギリス出身の建築家。明治10年（1877）に日本の工部大学の教授として来日し、鹿鳴館、ニコライ堂、政・財界の邸宅などを設計。

夫人\*

前波くめ。

ウラ\*

コンドルの娘ヘレンの長女ウルスラ。ウラはコンドルがつけた愛称で、「浦」を意味。

あやめ\*

コンドルの孫の養育係か？

十三日 水 晴 朝いつものごとく海岸散歩、けふは中々あつし。夕方より雲出ゴロゴロと雷さへなりいだし、幸に六時ごろ夕立来る。これにていく日間かの早も少しはしめりたるやうなり。しかし直にやみ、七時ごろより一寸海岸に出たり。後月よろし。

十四日 木 晴 けふはくもりて涼し。朝あみの上るのを見てかへる。朝、鍋島家より手紙にて、今十四日午前八時三十八分新橋発にて、侯爵、同夫人、尚子\*、大磯へ御出かけに付、御昼の食事を御願ひ申上度との事故、時刻色々支度して御待申、ほどなく十一時過ならせらる。ゆるゆると遊ばし御膳もさし上、午後、蓄音器などしてらくにくらし、四時過御かへり相成、一寸御別邸に御立寄に相成、又夕食後、七時ごろ海岸づたひに鍋島家別邸迄行。ともに海岸へ出、月をみながら、しぎ立沢の辺にて御わかれ申。皆々様は直にステーションの方へならせられ、八時七分発にて御帰京遊ばし、いつ子等は又海岸づたひに風も涼しく、八時ごろ家にかへる。又後、芝はらにござを引、すずみて十時ごろねる。

一 不二、敷島の御菓子及罐づめ五。一 伊つ子へ七宝花瓶、帶上、卵きり。一 手遊三品づつ子供らへ。一 次へ金三千疋。

右御土産として被進る。御かへりの折り、虎まんぢう二さし上る。

侯爵、同夫人、尚子\*

伊都子の父の鍋島直大、母の栄子、妹の尚子。

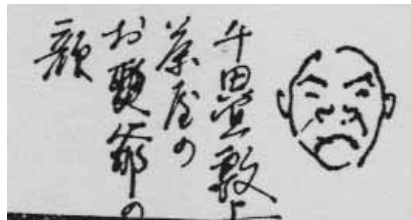
十五日 金 晴 朝同じく海岸散歩、中々日中あつし。夕方海岸散歩、月よくここちよろし。

十六日 土 晴 朝同じく海岸散歩、砂にて山などこしらへ遊ぶ。浪高し。日中ことにあつし。夕方海岸に出たるに浪高く、しぶきかかり、うつかりすとかぶりそうなり。しかしのどにはよきそうなり。衣服其他じめじめになる。月も出、中々愉快なりき。

十七日 日 晴 午前四時起床、五時三十分出門、規子だけ人力車、あとは皆徒歩にて千畳敷に登山す。三宅山附近にて規子もおり、ともに登山。道も大ききよろしく、道々風景よく時々雲るため涼しく、頂上にたつしたる時、六時二十八分なりき。西によりたる東屋にて皆々やすみ、各方面のながめよろしく、写真などもうつし、持参のサンドウキツチ、桃等食し、猶又、名物五郎の力餅ちもとりて食せしに、わりおいしく、おみやにもととのへ、二時間も遊びて九時過帰邸す。かへりは中々あつく、汗だらだらなりき。午後、コンデル氏方より使にて、お寿し二はち来る。早速一同にてひらきたり。夕方は又、いつもの如く、海岸に出、すずみてかへる。

〈上欄〉 千畳敷上茶屋のお爺の顔【図参照】。

図



十八日 月 雨時々晴 天皇皇后両陛下には本日日光御用邸へ御避暑のため行幸啓あらせらるるなり。いつ子も御奉送申上るはづながら、旅行中に付、御ことわり申上る。

〈上欄〉 午後日光御用邸にあて皇后陛下御機嫌伺の電報を発す。

十九日 火 晴 昨夜より引きつづき雨にて一同大悦び。午前九時過、晴たる故、十時ごろより海岸に出かけ河のところにてあそび、釣舟など見てとうとう十二時迄遊び、かへる。夕方はいつもやうに海岸に出、となりのあやめさん、ウラさん、バレ\*さん等と遊び、七時半ごろ家に入る。後月よく、芝わらにて月見して九時過寝る。

バレ\*

コンドルの娘ヘレンの次女バーバラ。バレはコンドルがつけた愛称バラ。バラは「薔薇」を意味する。

二十日 水 晴 朝いつものごとく海岸にて遊びたり。九時半過、伊藤梅子殿来訪、久々に逢ふ。しばらくはなし（此ほどの御礼に来られたるなり）。十時過かへる。十一時四十分ごろ、宇野定御機嫌伺として来る。皆々大よろこび、夕方は皆々に海岸に行、足のみ入り、相かわらず、あやめ、ウラ、バレ一等と遊びかへる。後、九時過、あまり月よろし故、砂山迄出たり。

〈上欄〉 一 コンデル氏方へ、此ほどの当【答】礼として罐づめ五、とりの子（懐中しるこ）一箱を送る。

二十一日 木 晴 朝涼しく、ゆかたにては少しくすずし過る位なり。六時過より海岸あるき、けふは漁船上り、めづらしくたこなどとれ、小さきたこ、子供らがつかまへ、方子のバケツに入れてくれたり。家に持ちかへる。又、曇にて涼しき故、九時過より海岸に行、川の中にてやや遊び、砂浴などもして十一時かへる。海軍の演習なるにやドンドンと遠く砲声聞ゆ。午後はねん土にて色々こしらへ遊ぶ。夕方、雨降となり海岸にも一寸出たれども、直にかへる。サダ、カツ、タマは町の方へ見物かたがた出かけ、明日より開かる大磯座の稽古芝居をも見物してかへる。けふは朝より井戸のポンプ取付に東京より来り、やう午後九時半終りかへる。

二十二日 金 雨 昨夜よりの雨やはりやまず。午前九時半、宇野定御いとま申、右に付、献上品、御挨拶として金二千疋、おまん一箱を遣す。けふは井戸がへなれども、正午迄にすむ。よき水出る。終日降たれども、夕刻晴、一寸海岸へ出、中々さむし。地引あみにて十匹ほどかかり、それを御姫様へとて漁師もち来りたり。其人は八千代といふ人の息子にて、御出入の薪やの人なりき。

〈上欄〉 名古屋へ手紙を出す。

二十三日 土 晴 清く晴わたり、ここちよし。朝海岸散歩、少しく寒し。午前八時ごろ俄に音のぶこゑする故、出みれば思ひがけぬ朝香宮様富士の演習地より行軍にて御かへりの途中、一ト足、兵より先にならせられ、御立寄になりたるなり。まづまづ御休み遊ばせと申、御茶、シトロン、桃などさし上、凡一時あまり御休みになり、兵も通過したる故、又々御馬にて出立たせられたり。御附武官御供、今晚は藤沢泊にて、明日御帰京のよし。九時過、又々小林タメ娘貞、及しづ（あかんぼ）をつれ来る。いつにかわらぬ質樸なる人なり。家に出来たりとて、ぶどう、とうもろこし等持ち来る。同十一時半ごろ、桜井御用取扱（除服出仕仰出されたるに付）御礼として来る。果物一、子供らへ人形等献上。又、竹原【恭太郎】家扶御用にて来り。午後いつ子に色々たづぬる事などして、夕刻迄。午後二時ごろ、一同にて海岸に行、遊びてかへる。午後八時九分大磯発にて桜井は帰京。竹原は九時二十七分大磯発にて名古屋へ向け出発せり。タメは一泊す。

〈上欄〉 あやめさんに此ほど子供らにせどものくれたるに付、帽子、針さしをやる。桜井に御まんぢゅうを一箱やる。

二十四日 日 晴 朝よき晴、同じく海岸散歩。二ノ宮附近迄行、あみ上るのを見てかへる。日中も涼しくくらす。午前九時過、飛田家従、東京より来着。午後、井戸屋など来り、少しくなほし、それぞれまとめ、午後三時十六分大磯発にて、白井家従帰京す。同五時半過、小林タメ、子供つれ家にかへる。右、タメにおまんぢゆう一箱、及、方子より着古しのメリンスの着物一、おもちや二品を遣す。規子よりサダへ人形をやる。夜、切通し向ふの身代り地蔵の縁日に付、一寸夜店を見に行。わりににぎやかかなりき。

二十五日 月 晴 風あらし。午前六時過、いつものごとく海岸散歩。午前九時ごろジョードンあやめさん、今日より帰京に付、御いとまごひに来る。夕食後、一同にて大磯に行、第一に嶋立沢に立寄、古跡をたづね、少く早き故、町に出、こよろぎ焼\*など買ひ、菊屋の前より引かへし、八時三十分帰邸す。中々暗く小磯町はきみわるし。

こよろぎ焼\*

「こよろぎ（小余綾・古余綾・小余呂伎・小洵綾）」は大磯町から国府津にいたるあたりの地名。「こよろぎ焼」は大磯の「小洵綾窯」で焼いた器。

二十六日 火 時雨少しく嵐 夜来の雨ははれたれども、何となくあれ模様なり。午前六時過、いつものごとく朝の散歩に海岸に出たれば浪高くおそろしきほどなり。漁舟出、地曳網も丁度よければ、しばらく見てありしが、あまり魚も取れず、それに舟を引上るのに、中々浪のため引もどされ困難のやうなりき。其内雨降出したる故、いそぎ家にかへる。ますます浪あらく、午後音のみすさまじき故、砂山迄行、見しに二丈【約6メートル】ほどもあらんかと思ふ大浪、あとからあとからよせてはかへす音、まるで百雷の一時に落るやうなりき。いつまでもあかずながめみたり。時々雨降、少しくあれぎみなりき。

二十七日 水 嵐 夜中雨の後、追々あれ出し、午前一時ごろより暴風雨となり、北より吹つくる音、さながら小石を雨戸に打つくるやうにてもものすごく、海の方にては、ますます浪あれくるひドドンゴードドンゴと其すさまじき限りもやらず。そこここと見まわる。やがてスマ一寸用たしに起、部屋の方に行しに、北より吹付し雨は中にしみ、かべより天井にもれ、女中部屋の押入より天井は雨もれにて畳もボトボトになるほど大さわぎにて、盥バケツなど受け、あちこち雨もりにて、あるとあらゆる受けものを出しても、まだ追附かぬ有様、さわぎの中に夜はほのぼのとあけそめたれども、いかんともせん方なく、六時過迄ふしどの内にて音を聞みた

り。七時ごろよりますます風つよく、二階より海上を一寸見れば水平線は高く見え、遠く何重となく重なりたる大山の如き浪のうねり来り。岸には白き泡はたへまなく上り、たしかに二丈はあるならんと思はるる大浪あとよりあとよりやすみ間なくうちよせ来り。今や砂山をこえておしよせはせぬやとおそろしきやうなり。雨もますますつよく、いかになり行ならんと思れたり。十一時ごろ、飛田家従、砂山迄行しに、丁度山の下迄浪来りみて、立てば雨うちよせ体はいたむ位なりとの事なり。

午後少しく雨も小やみになり、風も少しくなぎたる故、一寸砂山迄出て見れば、実に浪は猛りくるひ、砂山の下迄白きあわをたてて打よせ、いつも散歩の折、おもしろく遊びし砂原は皆大なる岩あらはれ、其すさまじさ、いわん方なし。又、夕方も一寸見る。午後五時ごろやうやうほんとの晴となり、西の方より夕日まばゆくさし出、一面青き空となり真に上々晴なれども、浪はまだまだおさまらず、音はゴーゴーときこゆ。夕食後、又々砂山に出たるに、下は一面大岩と化し、いつもの（小さき方）川など丈余の岩石あらはれ、谷合より流れ出る水ほとばしり、さながら保津川の奥深くたづねるやう。前は一面の岩石に浪のあたる様、一夜の内にかくもながめのかわるほど変化せしとは、夢のやうなり。東京に一寸雨もりの事など申やりしに（アスカフマイル\*）のことなりき。

アスカフマイル\*

「明日、家扶参る」の意味の電報文。

二十八日 木 晴 めづらしく晴にて少しく暑し。午前五時過ごろ竹原家扶来磯、直に大工ともどもわるき場所見まわり、それぞれ申付る。午前中、朝も海岸にてめづらしき岩を飛びあるき、石をひろひなどす。色々かたづけ、後夕食後、またまた川向ふ迄、石をひろひに行、それぞれにかへる。コンデル氏方へ此ほど当【答】礼に大磯まんぢう百を遣る。〈上欄〉竹原、午後かへる。

二十九日 金 晴 またまたはれ。午前五時過起き、お名残り、海岸へ行。思ふさま石をひろひ、七時かへる。それより支度して、十一時十七分大磯発にて帰京す。午後一時二十八分新橋着す。汽車中にてお弁当。

九月二十四日 水 晴 秋季皇霊祭に付、午前宮中へ御参内（賢所）。十一時還御、御めしかへの後、十二時五十四分渋谷発にて、両人大磯別邸へ赴く。三時三十四分大磯着。

二十五日 木 晴 長閑なる秋日より。午前六時

起床、早そく海岸散歩に出たるに、此月はじめの岩のありさまはほとんどあとなく又々もとの砂原となり残念なりき。一度、食事にかへり又さらに十時ごろより皆々にて出かけ、鍋島別邸の辺迄行。十一時半かへる。午後又西の方へ一寸散歩に行、三時過かへる。東京より手紙にて、規子此ほどより少々風気なりしが、昨日迄さしたる事もなかりしが昨夕三十八度二分の熱出たるよし申来る故、用心するやう又日曜はとともむずかしき故、やめだろと申やる。

二十六日 金 曇り 中々寒く、セルに羽織にてもよろしき位なりき。午前六時四十分より散歩に出かけ、七時半かへる。又、食事後十時ごろより皆々様にて出かけ、川のほとり迄行。しばらく遊び、身代地蔵の方よりかへる。いつ子も少々風気にてここちあしく、午後雨、夜はますますつよく、少しくあれもやうなりき。東京より電報にて「ノリミヤオヤメマサミヤイカガ\*」との事故、こちらよりの手紙もいまだつかぬやうす故、又まちがうといけぬ故、雨降にてきのどくながら飛田を一寸郵便局迄やり、電話にてよく申、方子と規子とよく相談した上、よければ方子だけ参りてもよろしと申たるに、兩人にてよくよく相談ととのひ、いよいよ予定通り方子、日曜日大磯へ来るとの事なりき。

ノリミヤオヤメマサミヤイカガ\*

「規宮お止め、方宮いかが」の意味の電報文。

二十七日 土曜日 雨後晴 昨夜来の雨中々やまず、つくねんとして半日くらす。正午頃、少々やみ間に一寸傘をさし、砂山迄浪を見に行。あまり高からず。又々降、午後二時ごろより晴かけ、あとは上々晴となる。方子は午前十一時、学校のひけより直に新橋に赴き、十二時十分発にて午後二時二十四分大磯へ着、無事二時四十分別邸に着す。幸にこの時分より天気になり、大よこびなりき。夕方、湯も終り、四時ごろ皆にて散歩に出かけ、海岸にて石ひろひして、五時かへり、久々西洋料理にてにぎにぎしく、食後は奥表よりてにぎにぎしく色々の遊びをなし、大わらいして八時やめ、九時寝る。

二十八日 日曜日 晴 上々晴。午前六時三十分より出かけ海岸散歩、又々石ひろひ、昨今は石多く出たり。七時半かへる。食事後又九時前より、方子と石取に出かけ、十時過かへる。これよりいそぎしたくし、十一時に食事をすまし、同三十分出門（兩人）、四（五）十分大磯発にて国府津に至り、皇太后陛下桃山御参拜のため京都へ行啓に付、御通過をここにて奉迎送し、十二時五十五分、又国府津発にて大磯へかへる（一時十一分）、後入浴やら何やら

にてごたごたし、方子とともにおやつを食し、同三時半、方子は出かけ、同四時一分大磯発にて帰京せり。夕又々一寸海岸へ出かけたり。

二十九日 月曜日 晴 午前七時ごろいつもの如く海岸散歩。朝食後は色々支度してしまひ、十一時五十分出門、一同帰京の途につく。午後十二時二十七分大磯発、同二時五十七分渋谷着、帰邸す。後、事なし。